

BOOK REVIEW

間接法による吃音訓練 自然で無意識な発話への遡及的アプローチ—環境調整法・年表方式のメンタルリハーサル法

川の流れのように

人が、「思い」をことばにして口に出す。私たちが普段何気なく行っているこの行動の中身はどのようなになっているのであろうか。もちろん脳の営みであることは間違いない。Levelt¹⁾によれば、ことばの表出は、大きく、語彙選択 (lexical selection) から語形変換 (form encoding) を経て、構音設計図 (articulation score) へと至るプロセスから構成される。さらに細かく述べると、語彙選択は、伝えたいメッセージから語彙的概念 (lexical concept) へのマッピングと、それに続くレマ (lemma) の活性化から成る。レマとは抽象的な語のノードである。一方、語形変換は、語の形態素をなす音韻コードの回収、音節形成、音素変換の3過程からなる。

「話す」というプロセスを川の流れに例えようと、メッセージの想起は地下水の湧出であり、最終的なことばの表出は河口ということが可能かもしれない。

著者によれば、特に言語獲得途上にある小児期から学童低学年期において、人がなんらかのメッセージをことばで表出した際に、発音の稚拙さや不正確さに対して他者から叱責あるいは訂正を受けるようなエピソードがあると、その「発話表出体験」に「負の情動イメージ (不安・恐れ)」というタグが付されてしまうことがあるのだという。そしてやがてそれが般化し、まったく別の場面であっても、同じ単語あるいは文を表出しようとする、「あの出来事 (負の情動イメージ)」も対想起されてしまい、それが、Levelt のモデルでいうところの語形変換 (音韻操作や構音操作など) にあずかる発話機構の正常な発動を阻害し、結果として吃症状となって現れてくるという。

吃音の発現をこのように考えていくと、

その障害メカニズム並びに指導・治療技法に関して2つの立場が併存することは頷けるところである。1つは吃音を発話機構の異常動作ととらえ、そこに対して「発話訓練 (流暢性促進訓練)」というかたちで直接的に介入しようとする立場、すなわち直接法である。そしてもう1つは、あえて発話機構の異常動作には介入せず (なぜなら、何も無い時には正常に機能するのだから)、発話の源である「メッセージ想起」の際に、絡まりついて対想起されてしまう「負の情動」タグをはずそうとする立場、すなわち本書が提唱する間接法である。著者の言を借りれば、本来スムーズであるべき発話という川の流れに対して「負の情動」という横やりを入れさせないようにすることなのである。

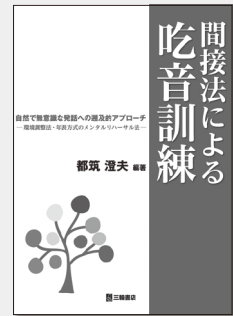
吃音に対する指導・治療の領域では、長年、直接法が主流であり続けたとのことであるが、本書は、そのパラダイムの転換を目指す。まさに「自然で無意識な発話への遡及的アプローチ」である。

本書は、吃音を含む言語障害全般での約40年間にわたる著者の臨床経験とエビデンスの中で温められ醸成されたものであり、今回、満を持しての発刊を心から喜ぶたい。

評者は、本書を、吃音に関する本格的指導書という範疇を越えて、「人間が話すということはどういうことか」ということを深く考えさせてくれる人間学の書として読みたい。

●文献

- 1) Levelt WJ : Spoken word production : a theory of lexical access. *Proc Natl Acad Sci USA* 98 : 13464-13471, 2001



●都筑澄夫=編著

(B5判/252頁/3,800円+税/三輪書店/2015年)

▼ 評者

小嶋知幸

武蔵野大学大学院人間社会研究科/武蔵野大学人間科学部 教授、言語聴覚士/医学博士